



現代における批判的思想の課題と唯研の射程

橋本, 直人

(Citation)

唯物論研究ジャーナル, 1:61-66

(Issue Date)

2008

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003918>



パネル・ディスカッション「戦後思想における全国唯研の歴史と現代の課題」報告

現代における批判的思想の課題と唯研の射程

橋本 直人 HASHIMOTO, Naoto

2001年9月11日のいわゆる「同時多発テロ」以降、むき出しの暴力と敵意、排他意識の横行する状況は目を覆うばかりである（もっとも、実際にはこうした状況は経済至上主義に先導されたグローバル化の、ということはアメリカを中心とする帝国主義的な世界秩序再編の進展とともに、すでにテロ以前から始まっていたが）。またこれに呼応して、現代社会の状況に対して批判的な諸思想もまたその批判を先鋭化するとともに、他の批判的な諸思想との連携を通じてより広範な批判の展開が急務となっている。

この小論では、こうした「同時多発テロ」以降の動向を背景として唯研の近年の取組みを概観しつつ、やはりテロ以降の状況下で改めて注目される批判的諸思想の一つである、ポスト・コロニアル思想と関連づけて唯研の位置づけと課題を検討したい。

*

そこで、まず『唯物論研究年誌』（以下『年誌』と略）を中心に、2001年以降の唯研での主だった議論、研究を概観すると、意外なことに気づかされる。それは、このいわゆる同時多発テロ、あるいはテロ以降の状況について、直接に言及したものが思いのほか少ない、という事実である。例えば『年誌』を見る限り、この問題に直接に言及している論文は『年誌』7号（2002年）掲載の佐藤和夫氏の論文「アメリカと暴力と民主主義」[佐藤2002:240-253]が挙げられるぐらいで、同時多発テロおよびそれをめぐる状況についてはほとんど論じられていないのである。

もちろん唯研は学術団体であってジャーナリスト団体ではないのだから、つねに時事問題に対して直接に発言するべきだ、などと主張したいので

はない。だが、これが例えばイラク戦争以降の状況となると、主に新たな帝国主義的支配をめぐる問題としてさまざまな形で活発に議論されていることが確認できる。それだけに、いわゆる同時多発テロをめぐる議論の空白には、意外な感を禁じ得ない。特に、同じく批判的諸思想の一つと考えられるポスト・コロニアル思想の領域においては、同時多発テロからイラク戦争以降の状況に至るまで一貫して活発な議論が展開されていることと対比してみるならば、この「空白」、あるいはイラク戦争と同時多発テロとの「落差」は、現在の唯研における議論について、なにがしか示唆するところがあるのではないだろうか。

そこで、次に唯研の議論の中でポスト・コロニアル思想がどのように受けとめられているかをたどってみよう。そうすると、これもまた意外なことに、ポスト・コロニアル思想が主題的に取り上げられることが思いのほか少ないことが明らかとなる。同じく『年誌』をたどってみると、ポスト・コロニアル的な要素を含む論文はいくつもあるのだが、明示的にポスト・コロニアル思想を主題として取り上げているのは、『年誌』2号（1997年）に掲載されている辻内鏡人氏の論文「アイデンティティと差異をめぐるポストコロニアルの投企」[辻内1997:40-70]ぐらいであることがわかる。しかも辻内氏のこの論文はポスト・コロニアル思想に対してかなり厳しい評価を行なっているのである。辻内氏によるポスト・コロニアル評価については後述するが、その一方で中西新太郎氏をはじめとしてポスト・コロニアル思想との積極的な連携を図ろうとする方向性もまた唯研の中に見て取ることができる。

このように、ポスト・コロニアル思想が唯研の中でどのように受けとめられているのか、受容されているのか批判的に位置づけられているのか、何

とも判然としない。例えば(唯研会員ではないが)小倉利丸氏は世界社会フォーラムについて「僕自身どちらかと言うとマルクス主義をベースとしてきた者からすれば、それとどう接点を見つけるのか。彼らの運動はわかるけれども、それにどういいう理論や思想があるのかということになると、あんまりはっきりしない。運動論ではあるけれども、理論や思想ではない。そのへんのギャップが僕の中で整理がつかなかった」と述べている[武藤・小倉・木下・大屋 2005:65]。この小倉氏に似て、「マルクス主義をベースとする」唯研からすると、ポスト・コロニアル思想は「どこか扱いかねる」といったところがあるのではなかろうか。

しかし、冒頭で述べたように、現在の先鋭化した暴力的な状況の中で批判的な諸思想の連携が急務であるとするなら、マルクスおよびマルクス主義をベースとする諸思想とポスト・コロニアル思想とを関連づけることが困難であるというのは、決して小さな問題ではないだろう。そこで、以下ではポスト・コロニアル思想から代表的な思想家としてエドワード・サイードとガヤトリ・スピヴァックの議論に触れながら、特に唯研に関係しそうな部分に注目してポスト・コロニアル思想の議論の特徴を見ておきたい。その際にはポスト・コロニアル思想に対する辻内氏の厳しい評価についても本稿の筆者なりにとらえ返したい。

＊

さて、以上の問題設定からして、ポスト・コロニアルの論者たちの主張の中でもすぐ目につくのは、「オリエンタリストとしてのマルクス」という議論であろう。例えば植村邦彦氏は次のように述べている。

「エドワード・W・サイードがマルクスを『オリエンタリスト』の一人に数え入れて以来、マルクスの『世界史』認識が『西欧中心主義的』なものであることは、改めて問題にするまでもない、自明のことのよう論じられてきた。」[植村 1999:138]

このように、サイードが「マルクス＝オリエンタリスト」と規定したことに対して、植村氏はマルクスの理論の異なる側面と限界を取り出そうとしているのだが、ここでは氏の議論そのものを検討する余裕はない。また、ここでサイードの規定の根拠として取り上げられるのは、あまりにも有名な(有名になってしまった)「イギリスのインド支配」に関するマルクスの議論であるが、この問題についてはすでに数多くの議論が戦わされており、やはり本論で立ち入って検討することは避けたい。ただ、ここで確認しておきたいのは、ポスト・コロニアル思想とマルクスとの関係は決して単純なものではない、という点である。

実際、ポスト・コロニアル思想の文献を一読すれば、彼らが「マルクス＝オリエンタリスト」と規定して切り捨てるほどマルクスに対して単純な態度を取っていないことを見てとるのは決して難しいことではない。例えば先の植村論文で触れられているサイードの有名な一節にしても、その文脈はもう少し複雑である(もっとも、サイード自身はマルクスについてまとまった議論をほとんどしていないのだが)。やや長い引用となるが、煩をいわずに見ておきたい。

「マルクスの文体を見ると、我々は、東洋社会が力づくで変化させられていく過程で東洋人がこうむるさまざまな苦難に対し、我々が同じ人間として当然感じるいとわしさと、この変化が歴史的必然である認識とを、いかにして両立させるかという困難な問題にいやでも直面せざるを得なくなるのである」[Said 1978:153=1993:上 351]。

「マルクスが、それでもなお何がしかの共感 fellow feeling をもちえたということ、つまり、かりにわずかではあっても、憐れなアジアと一体化 identify しえたという事実は、レッテルが威力をふるい始める以前に…何ごとかが起こったということを示唆している。あたかも、(この場合にはマルクスの) 個人としての心情 individual mind が、アジアの中に集合的・公的[類型的「オリエント」像——橋本]以前の個性 a

precollective, preofficial individuality を…見出しはしたものの、彼が使用せざるを得なかった語彙そのものの中に潜む、はるかに峻厳な検閲官に出会ったとき、ついにその個別性を手放してしまった、とでもいうかのごとくである」[Said 1978:155=1993:上 355-6]。

サイドはここで描かれているようなマルクスのケースを「例外とまではいわないまでも興味深い複雑な事例」[Said 1978:153=1993:上 351]と呼んでいるが、実際、この引用からうかがえるサイドのマルクス評価は決して単純なものではない。むしろ、マルクスでさえオリエンタリズムのステレオタイプから逃れることができなかった、マルクスはその「個人的な心情」においてこそ、イギリス帝国主義の暴力にさらされるインドの村落の人々に対する共感を示していながら、アジアについて当時用いざるを得なかった概念のはらむオリエンタリズムによってその共感が「抑圧」されてしまった（まさにフーコー的な「知＝権力」の問題である）、というサイドの評価であろう。つまり、ここで問題とされているのは、マルクスの思想に固有の問題というよりも、それらさえも逃れることのできなかったヨーロッパ近代のオリエンタリズムなのである。

サイドはヨーロッパ近代のオリエンタリズムに対して批判の口火を切った思想家である。ヨーロッパ近代にとって（またそれに対応する被植民地の支配的文化にとって）オリエンタリズムがどれほど根深い問題であるか、そのことをサイドは指摘し続けた。だがそれだけに、ちょうど近代とマルクスとの関係が決して一筋縄ではいかない複雑な問題であることに対応して、マルクスに対するサイドの関係も決して単純ではないのである。

こうした「複雑さ」は、さらにガヤトリ・スピヴァックの議論にも見てとれるだろう。とはいえ、まずは例えばスピヴァックの次のような個所を見ると、それこそマルクスが「オリエンタリスト」として全面否定されているかのようにも見える。

「…『ネイティヴ・インフォーマント』と呼ばれる視点の、このような現在進行中の再記銘の作業は、マルクス主義の伝統の中では排除されてきたし、今もなお排除され続けている。それというのも、マルクスはヨーロッパ資本主義の有機的知識人であったからである」[Spivak 1999=2003:112]。

しかし、実際にはスピヴァックはむしろマルクスを評価しているとさえ言えるように思う。事実、スピヴァックはマルクスをめぐる詳細な議論の起点として、「マルクスがおそらくはただ一回だけ使用した悪名高い言葉」である「アジア的生産様式」の問題を取り上げるのだが、それはこの言葉をもって単に「マルクス＝オリエンタリスト」と規定して済ませるためではない。むしろ、この概念において問題となっているのが、実はヨーロッパ的自同律に対する他者の存在をめぐる問い、「なぜ差異が存在するのか、なぜ『ヨーロッパ』だけが唯一の自己同一的な『同』ではないのか、なぜ『アジア』があるのか、という問い」[Spivak 1999=2003:117]である、と解釈することを端緒として、スピヴァックは「アジア的生産様式」と「価値」という二つの概念を軸に、マルクスの脱構築的解釈を展開していくのである。

この小論では、スピヴァックの難解な議論について評価することはおろか、概観することさえ断念しなければならない。しかし、その詳細なマルクス解釈（の解釈といった方が妥当かもしれない）の末尾において、スピヴァックが「ネイティヴ・インフォーマント」の視点が近代の大西洋研の伝統の背骨を成す思考において…どのように排除されてしまっているか」に対比して「マルクスがその伝統と戦う同時代人であり続けた」[Spivak 1999=2003:169]と位置づけていることは確認しておいてよからう。マルクスの思想（というよりテクスト）は、ヨーロッパ近代中心主義に対して加担する可能性と批判的な可能性とをともにはらむ両義的な存在として位置づけられているのである。

以上のような議論を見てくると、ポスト・コロニアルの思想家たちにとって、マルクスは単純にオ

リエンタリストと位置づけて用済みになるような存在ではないことは明らかであろう。「普遍性」や「本質」の水準に自己を位置づけるヨーロッパ中心主義に対する批判を展開するポスト・コロニアル思想は、同時に、例えばアジアを排除することで自らを「普遍的なもの」として提示するヨーロッパ中心主義的思考をマルクスがどこまで克服できていたのか、という問題もまた提起していることになる。そして、すでに見たように、この問いに対してポスト・コロニアル思想は(やや批判的ながら) かなり両義的な評価を行なっているのである。

ここで冒頭の問題設定に戻って考えてみるならば、唯研 (をはじめ「マルクス主義をベースとする」批判的諸思想) がポスト・コロニアル思想を「扱いかねる」ことと、この「マルクスと近代＝ヨーロッパとの関係」という問題は決して無縁ではないのではなからうか。唯研にとってポスト・コロニアル思想の「扱いにくさ」は、普遍主義・本質主義(ひいては「科学主義」や「発展史観」としてのヨーロッパ近代中心主義をマルクス(ないしマルクス主義) がどの水準まで批判しているのか、という問いの「扱いにくさ」と同質なのかもしれない。

＊

だが、私見では、こうした「扱いにくさ」にもかかわらず、唯研で展開されているようなマルクス主義的な思想とポスト・コロニアル思想との連携は魅力的な成果をもたらさうように思われる。その具体的な問題として、ここでは特に近年唯研において盛んに議論される主題となった、現代日本の青少年のアイデンティティにかんする問題を考えてみたい。

とはいえ、こう述べるとすでに意外の感をおぼえられるかもしれない。というのも、例えば前述した辻内氏がポスト・コロニアル思想を批判した際に焦点をあてられたのが、まさにアイデンティティの問題だからである。

辻内氏がポスト・コロニアル思想を批判した最

大の論点は、「抵抗する主体」という理念を掘り崩してしまうという点にあった。例えば、辻内氏は以下のように述べている。

「…マイノリティの社会運動から見た場合、奇妙なことながら、ポストコロニアリズムといわれる思潮のもとで、それまで抵抗の思想を支えてきた『アイデンティティ』、『文化』、『多文化主義』といった概念が否定的な含意を持つ言葉として烙印を押され、一つずつ武装解除されてゆくように見える…」[辻内 1997:41-2]。

ここで辻内氏の批判する論点は、まさに上で見たポスト・コロニアル思想の本質主義批判と密接に関連する。ポスト・コロニアル思想は、ヨーロッパ中心主義の根底にある本質主義・普遍主義と同質のものを、植民地支配に抵抗する被植民者のうちにも見出し、これを批判せざるを得なかったのだが、辻内氏はまさにそのことによって、現在においてもなお継続されるべき抵抗の拠り所が失われる危険性を指摘し、そのような危険性を生み出す言説としてのポスト・コロニアル思想を厳しく批判したのである。

この辻内氏の批判は、他ならぬポスト・コロニアルの思想家たち自身自覚するところではあった。例えばスピヴァックの言う「戦略的本質主義」がその一つなのだが、こうした概念を提起せざるを得ないということ自体が、この問題についてのポスト・コロニアル思想の立場の困難さを示しているとも言えるだろう。あるいは、サイードの以下のような慨嘆も同じ隘路を示しているように見える。

「だが、すべての帝国主義とすべての帝国主義の敵とが提示しているのは威圧と対抗的威圧の終わりなき円環ではないのか、それとも新しい地平は開かれるのか？」[Said 1993: 276=2001:143]

ポスト・コロニアルの思想家たち自身が明かすこうした困難は、辻内氏の批判が正鵠を得ている

ことを示しているだろう。にもかかわらず、改めて冒頭の問題設定に立ち返って考えるならば、同時多発テロ以降の、あるいはルワンダ大虐殺以降の現時点において、以下のようなサイドの懸念もまたやはり正当であったと考えるわけにはいかない。

「…いまやひたすら自己中心的で狭小な利害意識——愛国主義、排外主義、民族的・宗教的・人種的な憎悪——によって、実際に大量殺戮さえ起こりかねないのである」 [Said 1993: 20=1998:58]。

不幸にしてこのサイドの懸念が実現してしまった現在、やはり根底に本質主義を抱え込んだアイデンティティ概念を批判的にとらえるポスト・コロニアル思想の指摘は重く受けとめる必要があろう。確かに、ポスト・コロニアル思想の本質主義批判は、一歩間違えれば観念的な相対化に陥りかねず、ひいては支配者も被支配者も同等に相対化する無力な思想へと転落する危険性ははらむだろう。だからこそポスト・コロニアル思想では「誰がどのような立場から何について述べるのか」という問題を常に提起することになるし、また本質主義的アイデンティティの問題も、常にそのアイデンティティ確立と表裏一体の他者排除の観点から批判されることになる。そして、この批判が観念的な相対化に陥らないために、ポスト・コロニアル思想は〈排除される他者〉/〈他者を排除してアイデンティティを確立する自己〉という両者の間に存在するリアルな権力関係を（言説上の権力関係も含めて）考慮せざるを得ないはずである。

そして、私見ではここにこそ唯研（はじめマルクス主義思想）とポスト・コロニアル思想との連携の可能性があるとされる。実際、このリアルな権力関係についての分析を行なおうとするならば、その重要な理論的支柱の一つはやはりマルクスの影響をうけた諸理論とならざるを得ないであろう。その点で、唯研（はじめマルクス主義思想）はポスト・コロニアル思想に対して十分有意義な貢献をなし得るのではないだろうか。

またその一方で、近年唯研で議論されている青少年のアイデンティティの問題について、ポスト・コロニアル思想の知見は少なからぬ寄与をなし得るように思われる。例えば、現代日本の青少年における「新しいナショナリズム」について、『ゴーマニズム宣言』や『嫌韓流』を素材にすでに中西新太郎氏が一連の分析を提示しているが、そこで氏の指摘する「責められる日本という被害者像」と中国・韓国に対する強い差別意識（ここではあえて「排除意識」とさへ呼びたい）との関連は、ポスト・コロニアル思想の指摘する本質主義的アイデンティティの構成原理と対応してはいないだろうか。また、「被害者＝日本」という図式に垣間見える根強い不安感、例えば冒頭で触れた佐藤和夫氏の論文で論じられる「インディアンを虐殺してしまった不安」、さらにはそのような排除・抑圧した他者が回帰することに対する不安と同根のものには見えないだろうか。もしそのような解釈が可能であるならば、ポスト・コロニアル思想の示唆するところは大きいように思われる。

＊

以上、この小論は唯研においていわゆる「同時多発テロ」をめぐる議論がほとんど見られないことを手がかりとして、唯研（およびマルクス主義）とポスト・コロニアル思想との関係について考察してきた。以上述べたことからすでに明らかなように、本論の筆者はマルクス主義の専門的な研究者でもなければ、ポスト・コロニアル思想の専門家でもない。あえて言うならば、専門家でないからこそ、両者の関係について論ずることが可能だったように思われる。専門家であれば、両者の関係はそれこそ「扱いかねる」問題であり続けたかもしれない。

だが、だからこそこの小論の意義は、両者の連携に潜む障害と、にもかかわらず連携が必要なのではないか、という可能性の（傍目八目的な）指摘以上のものではない。もし本論の指摘を契機として、両者の関連に着目した専門家の議論が生まれるならば、これに過ぎたる喜びはない。

文献

- 植村 1999：植村邦彦「マルクスにおける『世界史』の可能性」『現代思想』1999年11月号
- 佐藤 2002：佐藤和夫「アメリカと暴力と民主主義」『唯物論研究年誌』7号
- 辻内 1997：辻内鏡人「アイデンティティと差異をめぐるポストコロニアルの投企」『唯物論研究年誌』2号
- 武藤・小倉・木下・大屋 2005：武藤一羊・小倉利丸・木下ちがや・大屋定晴「帝国へ挑戦する『世界社会フォーラム』」、『情況』3期6巻1号
- Said 1978：Edward W. Said, *Orientalism*. New York.= 板垣雄三・杉田英明監訳『オリエンタリズム』（上・下）平凡社（平凡社ライブラリー版）
- 1993：Culture and Imperialism. New York. =大橋洋一訳『文化と帝国主義』みすず書房、(1)1998年、(2)2001年
- Spivak 1999=2003：ガヤトリ・スピヴァック、上村忠男・本橋哲也訳『ポストコロニアル理性批判』、月曜社